



# ベトナム

## 輸出入品目が電気機械にシフト

ジェトロ海外調査部アジア大洋州課 小林 恵介

外資による電気電子産業の集積が進むベトナムでは、携帯電話の輸出が急伸。電気機械類の輸出増に伴い、集積回路や携帯電話部品の輸入が増えるなど、輸入品目にも変化が見られる。一方、地場企業による輸出は、依然として低付加価値な品目にとどまっている。

### 貿易・投資の主役は外資

ベトナムの主要輸出品目は従来、コメや水産物などの一次産品や、原油、石炭といった鉱物性燃料、縫製品、履物などの軽工業品だった。一方、輸入品目は、石油製品、一般機械、鉄鋼といった資本財が中心だ。つまり、一次産品と軽工業品からなる輸出と、高付加価値の資本財や工業原材料などの輸入、というのが基本構造。貿易収支の赤字が続いた理由も、ここにある。

ところが2012年に一転して貿易黒字を達成した。長年の貿易赤字から脱したのはなぜか。09年から続く携帯電話の輸出増加が、貿易赤字を解消したといつてよい。ワールド・トレード・アトラス（WTA）によると、08年まで、ベトナムの輸出品目で大きな比率を占めていたのは、原油・石炭といった鉱物性燃料

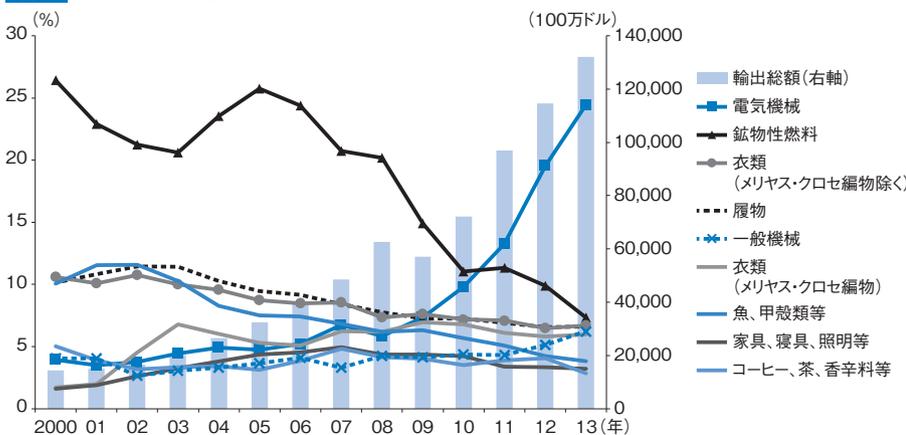
（輸出額全体の20.2%）だったが、13年注にはそのシェアは7.3%まで減少し、代わって携帯電話を含む電気機械類が24.5%を占めるようになった（図1）。

携帯電話輸出の急伸は、韓国企業サムスン電子のベトナムにおける事業展開とほぼ連動している。ベトナム進出は08年、以後スマートフォンやタブレット製品などを製造している。表は、同社関連企業のベトナムへの進出動向をまとめたものだ。サムスン電子が08年に事業認可を取得した後、バッテリー、電子部品、液晶モジュールなどの関連会社が次々に進出していることが分かる。サムスン電子自体も、13年に通信機器製造分野に追加投資した。いずれもベトナム北部に進出している点が特徴的だ。

ベトナム計画投資省によると、製造業のベトナム進出は、サムスン電子に限らず他の韓国企業も、やはり北部への進出が多い。07年には半数以上の韓国企業が南部に向かっていたが、12年以降に逆転したのだ。今後も、この傾向は続くと思われる。

輸出品目の変化に伴い、ベトナムの輸入品目にも変化が見られる。08年の輸入額の品目別シェアは、鉱物性燃料（15.4%うち石油製品が91.3%）、一般機械（13.8%）、鉄鋼（9.6%）、電気機械（9.4%）の順だった（図2）。それが13年になると、電気機械（23.8%）、一般機械（11.2%）、鉱物性燃料（7.7%）、プラスチック（6.4%）と順位が入れ替わった。また08年は、輸入された電気機械の25.2%が通信機械関連で、うち47.0%が携帯電話の最終製品だったのに対し、13年には電気機械輸入の32.3%が集積回路、27.2%が通信機械関連で、

図1 ベトナムの品目別輸出シェア



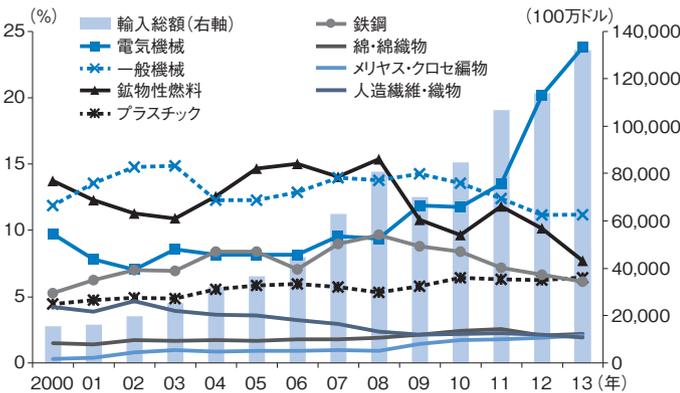
資料：WTAを基に作成

表 サムスングループのベトナム進出動向

法人認可年	企業名	製造品目	進出先
2008	サムスン電子	携帯電話など電子機器	Bac Ninh 省イエンフォン工業団地
2009	サムスン SDI	携帯電話用バッテリー	Bac Ninh 省イエンフォン工業団地
2013	サムスン電機	携帯電話用電子部品	Thai Nguyen 省イエンビン工業団地
2013	サムスン電子	携帯電話、タブレットなど通信機器	Thai Nguyen 省イエンビン工業団地
2014	サムスン・ディスプレイ	液晶モジュール	Bac Ninh 省イエンフォン工業団地

資料：各社ウェブサイト、各種報道などを基に作成

図2 ベトナムの品目別輸入シェア



資料：図1に同じ

その83.2%を携帯電話の部品が占めるようになった。集積回路もスマートフォンなどのIT機器に必要な部品であることを勘案すると、ベトナムの主要輸入品目はまさに携帯電話の製造と連動していることになる。なお、13年における集積回路の主要輸入元は、韓国(32.8%)、シンガポール(16.9%)、中国(12.4%)である。携帯電話部品の輸入元は、中国(67.6%)、韓国(31.0%)となっている。携帯電話部品輸入に占める中国のシェアは08年から急拡大した。中国から部品供給を受けてベトナムで携帯電話の最終製品を組み立てるとい構造が見て取れる。

上述したベトナムの貿易構造や投資動向を見る限り、地場企業の存在感は感じられない。ベトナム統計総局によると、14年の輸出額に占める外資系企業の割合は6割を超えている。輸入のそれも同様で、やはり6割近くを外資企業が占め、08年からはその割合が上昇している。

### 地場企業による裾野産業強化が課題

ここで、15年9月、中国・南寧市で開催された「中国 ASEAN 博覧会」の様子を紹介しよう。この展示会は、中国商務部、ASEAN 10カ国の経済・貿易部門などの主催により、04年から同市で毎年開催されている。テーマは、中国と ASEAN の貿易・投資促進だ。

各国がパビリオンを設け、各国企業がビジネス展開を狙う商品・サービスを紹介する。

15年、ベトナムパビリオンには104社がブースを構えた。取扱品目は、木工加工品が67社、食品が23社、残りがその他消費財など。

いずれも、中国への輸出を目的として出展するベトナムの地場企業である。食品系のブースでは試食・即売が行われ、中国人来場者で混み合っていた(写真)。中には、ベトナム企業の中国側代理店が販促スタッフを配置し、さらなる顧客開拓を図るブースもあった。「出展は10回目」と語る木工メーカーは中国市場におけるニーズと同展示会出展のメリットを強調する。だが、包装機械、刺しゅう機、建設機械、測定器などの工業製品を中心に販促する中国パビリオンと比較すると、ベトナムパビリオンで目にした商品群との差は歴然だった。

WTAで中国側の輸入統計を見ると、ベトナムからの輸入で大半を占めているのは電気機械と鉱物性燃料。直近の14年では電気機械が輸入総額の41.5%、鉱物性燃料が8.4%と、これら2品目で全体の半分を占める。この他、綿・綿織物(6.4%)、一般機械(5.6%)、木材(5.3%)、果物類(3.8%)が続く。上位4品目を除けば、ほぼ一次産品である。前述の輸出に占める外資系企業の割合と、中国 ASEAN 博覧会のベトナムパビリオンの様子から見て取れるのは、中国に輸出している一次産品がベトナム地場企業によるものであるということだ。

ベトナムにとっての課題は、貿易構造をいかに高度化させるかであり、地場企業をこれにいかに関与させるかである。実際、外国投資企業の大規模な最終製品生産が始まり、一次部品メーカーも進出するようになってきた。この一次部品メーカー向けの部品供給、言い換えれば「部品企業のための部品供給」こそが、地場企業にとっての参入機会となり得るのではないか。そのためには、金型や鋳物、金属表面処理や焼き入れといった裾野産業を構成する地場企業の強化が求められる。外資系企業の中でも中小企業の進出が目立ち始める中、できるだけ多くの地場企業が裾野産業分野に参入し、産業高度化の一翼を担えるようになることこそ、ベトナムの工業化にとっての重要課題である。【注】

注：WTAで入手可能な最新年。